

石原先生の遠い思い出

三一回生 近藤 節夫

一、ほやほやの新入部員

もう半世紀近くも前のことになる。「ノックオン」も知らなかったラグビー音痴の新入生が、湘南高校ラグビー部の一員となった。当時比較的体は大い方だったし、高校へ入学した以上何かクラブ活動をやってみようとの気持ちはあった。入学当初は硬式野球部の「選抜高校野球大会」甲子園出場の熱気か余韻となつて冷めやらず、学校全体にスポーツ振興の空気が満ち溢れていた。強くてわがものの顔の蹴球部からも誘われた。学校も新入生に積極的にクラブ活動に取り組むよう勧めていた。そんな雰囲気の中でつい何とはなしに「ラグビーをやってみよう」という気持ちか湧いてきた。小柄で優しい体育の仲宗根先生がラグビー部の顧問で、「近藤、身体が頑丈そうだからラグビーをやらなにか？」と強く勧誘してくれたことも大いに効いた。

入部した翌日、早速公式試合があった。土砂降りの横浜国大グラウンドで神奈川工高との何かの大会の緒戦であった。あまりの悪天候に中止を決め込んだのか、両校とも何人かの選手がグラウンドに現れず、ゲームには勝つたが、湘南が二人で神工が一〇人しか集まらない試合にならないゲームだった。ゲーム中にレフェリーが笛をくわえながら「あの生徒（つまり私のこと）は出ないの？」と私を指さして仲宗根先生に聞いている。仲宗根先生が「あの子は昨日入部したばかりで練習してないし、ルールも分からないから無理です」と

言つてやんわり断つていたのをはつきり覚えていた。試合後先輩たちが泥んこのまま屋外プールに飛び込んで身体を洗い、京急線南太田駅近くの銭湯で裏口からこっそり上がらせてもらいさっぱりした顔で出て来たことと、帰路仲宗根先生に旨いラーメンをご馳走になったことが昨日のことのように懐かしく思い出されてくる。

二、石原先生との出会い

その後暫くしてあの時のレフェリーが石原先生であるということを知った。これが、私と石原先生との初めての出会いであった。先生は、その当時高台にあった横浜国大グラウンドの坂を下りきった国道の反対側に古色蒼然と建つ市立横浜商業高校（通称Y校）の先生だったのだ。先生は神奈川県ラグビー協会の高校部会役員としても活動され、その年開催された神奈川国体では事務局の裏方として、またレフェリーなどの実行部門としても八面六臂の活躍をされた。私には試合で、また後に主将としてトーナメントの抽選や、キャプテン会議のためにY校を訪れる機会が少しずつ増えていき、石原先生とも話をするのが次第に多くなつていった。その当時Y校ではよく公式試合が行われた。強豪校のレベルの高い試合を見る機会も何度となくあった。とりわけ画期的だったのは、私か一年生の時、神奈川県代表の慶応高校が花園の決勝戦で名門秋田工業を破り全国制覇を成し遂げたことであつた。当時の慶応は、歴史と伝統、試合運び、選手の体格、スマートさ、ユニフォームなどどれをとつてもこれが同じ高校生かと思うほど全てに洗練され、ある種私たちの憧れの的であつた。

ある時、Y校で慶応の公式戦を見る機会があった。私たちのような坊主刈りで不揃いのユニフォーム姿とは異なり、選手が綺麗に髪を分け、垢抜けた黒黄色のジャージとピカピカのスパイクを履いて力強く縦横無尽に走り抜けるセンス溢れる試合展開は、青臭い私たちにはあまりにも刺激的で、私の傍らで観戦していた石原先生も「慶応は巧いなあ」と感に堪えぬように、思わず漏らした言葉が今も強く印象に残っている。

三、石原先生の思い出

新チームになった一年生の冬に新人戦で法政二高と対戦することになった。当時の法政はそれほど強くもなかったが、体格の大きい選手を揃えていた。私はその試合ではにわか仕立てのフロップだったが、法政の粗暴なまでの当たりの強さに味方のFWは試合半ばでほとんど全員が出血するありさまであった。それに引き比べわが湘南は掛け声も小さく、よく言えば闘志を内に秘め黙々と相手の手荒い攻撃を耐え凌いでいるとあってよかった。正に英国紳士のスポーツを実践(?)している感じであった。石原先生は私たちの試合態度を賞賛してくれ、後になって私たちの戦い振りは高校生らしいスポーツマンシップの発露だと言つて褒めてくれた。今でこそ高校生の試合ではスクラムは一米以上押すことが出来ないが、当時はFWが少し離れて勢いをつけ、「それ〜」とばかり相手目掛けて体当たりするといふ非常に荒っぽいものだった。その試合でレフェリーを務めてくれたのも石原先生だった。法政はレフェリーである石原先生の再三の注意にも耳を貸さず、ただ身体をぶつけ強引に押しつけてくるばかりだった。流石に温和

な石原先生も試合途中で怒りだし、「今度言うことを聞かずに乱暴なプレイをしたら直ちに試合を中止する」と法政二高を怒鳴りつけた。更に「法政は湘南を見習いなさい」と言つて私たちのプライドをくすぐってくれたりもした。結果は善戦及ばず、ノーサイド寸前にトライ(ゴール)され、〇―五で惜しくも敗れてしまった(当時はトライが三点だった)。

二年生の夏を過ぎる頃、三年生が練習にも試合にも少しづつ顔を出さなくなってくるのに伴い、二年生である私の役割も段々重くなつていった。国体予選、インターハイ予選などの都度私は三年生の渡辺主将に随いて抽選会に出掛けた。それは決まってY校の講堂だった。私はどういふわけか石原先生に妙に気に入られ、早く会場に着くと「近藤君、こっちで待っていなさい」と言つては宿直室でお茶や、お菓子をお馳走になったこともあった。

私が最上級生になり、主将となつてY校の抽選会や会議に出掛けて行くと石原先生はいつも講堂の入口で待っていてくれて、「近藤君、ここだ！ここだ！」と言つては会場内を案内してくれ、先生の席の近くに私の席をとつておいてくれた。あの当時、湘南眞頂の石原先生が笛を吹いてくれる時は、湘南がペナルティをとられることも少なかったような気がする。

しかし、残念なことに三年生になつて不思議と先生にレフェリーをやつてもらつた記憶がない。劣勢になつて反則をとられると石原先生ならペナルティにはとらないのにと虫の好いことまで考えた。公式戦の場で石原先生にあまりお会いすることもなく、また私もそのまま石原先生にお世話になつた感謝の気持ちを伝える機会もないままに思い出多い湘南高校のグラウンドを去る時がやつて来た。爾来

石原先生とのご縁もそれつきりになってしまった。石原先生は私にとっては他校の先生ではあったが、ラグビーをプレイしたおかげで個人的にも優しく親切に接してもらい、クラブ活動の枠を超えて別の面で私にラグビーの楽しさと奥深さを教えてくれた大切な恩師の一人であった。

四、衝撃的な旅立ち

その後長らく私はラグビーとは縁を切ってしまった時期があり、再び熱中し出したのは二人の息子がともにそれぞれラグビーが盛んな中学と高校に進学してラグビーを始めた時である。その時以来、今日まで再びラグビー病が膏肓に達しているありさまである。

さて、ここ数年の間に自分のラグビー人生を振り返っては、石原先生のことをふっと思いう出すことか何度かあった。そんなある時、私の父親を訪ねてくる銀行のセールスマンKさんがY校の卒業生だということを耳にした。三年前の暑い夏の一日、鶴沼の実家でそのKさんにお会いした。Kさんは間もなく銀行を定年で辞め、伊豆の田舎へ移るので父の元へ退職の挨拶にやって来られたのだった。Kさんは、確かにY校で石原先生が教鞭をとられていたことと自分も先生の授業を受けたことがあると仰っていた。

しかし、Kさんの話を伺っている内に思いもかけず、石原先生はすでにとうの昔に亡くなられたとの話にショックを受け、私はしばし茫然とした。密かに数十年振りの再会を果たす絶好のチャンスが訪れて来たと思ひ、私のことを覚えてるかどうかが気がかりではあったが、話が進めばきつと思ひ出してくれる筈だと勝手に信じて、一方では再会を楽しみ

にしていた。だか、他方で鬼籍に入られたのは最近のことではなく、かなり前の悲惨な交通事故によるものだと聞いて、これでは元々再会のチャンスはなかったのではないかと気持ち切り換えることにした。しかし何といつても石原先生に再会することが今や叶わぬ願いとなつてしまい、石原先生に永年積もったお礼の気持ちを直接言葉で伝えられないのが返す返すも無念でならない。

ところが、先生が亡くなられたということ話を話されてから暫く間をおいてKさんは、私に追い打ちをかけるように、更に愕然とするようなことを話してくれた。それは、先生が亡くなられた事故現場について詳しく語ってくれた時であった。石原先生が災難に遇われた場所は、あるまいことか先生が勤務していた【Y校の真ん前】の路上だというのである。そして、其処は何と私が先生と初めて出会った旧横浜国大のグラウンドの極く近くであり、そのグラウンドから坂道を下りきったY校前の路上で先生は車に撥ねられたということである。今でもはつきりと思ひ出すことか出来る。私もY校へ行く時、いつもながら交通の激しいその現場の手前の交差点を渡っていた。そうしてみると『石原先生と私か初めて出会った場所』のほんの目と鼻の先で先生が亡くなられたというのも何かの縁（えにし）と呼べないだろうか。

五、石原先生とのキズナ

どうしてあの温厚で素晴らしい先生が、横断歩道を渡らないで無謀にもあんな車が多い道路を横断したのだろうか。何か通勤途上の先生を急がせる理由でもあったのだろうか。追憶の思いは止めどもない……。

しかし、今更そんなことを悔やんでも詮ないことであろう。先生はもう永遠に逝ってしまったのだ。最早、先生に感謝の気持ちを伝えることは出来なくなっていました。先生にお逢いしてラグビーの楽しい思い出話を交わす千載一遇の機会も永久になくなってしまった。ひよっとすると石原先生と私の交流は、きつと弱い糸で結ばれていたのかも知れない。思い返すと先生には、無言の内にラグビーを好きになる原点のようなものを教えていただいたような気がする。ラグビーのお陰で私はこれまでの人生を他人の何倍も充実させることが出来たように感じている。これも先生との出会い、そして先生の温かいご指導と優しい思いやりが大いに寄与していると思っている。

石原先生とは、図らずも多感な青春時代に会おうことが出来て、短い期間ではあったが間わず語らずに心の通い合いが出来たことを心から幸せに思う。先生にはチョッピリ甘酸っぱく永遠に心に残る辛い思い出も残してもらった。先生にはもう一度とお逢いすることが出来ないことは千載の痛恨事であるが、ラグビーをこれからも愛し続けていくことこそが石原先生に対するささやかな恩返しだと思っている。

石原先生のご冥福を心よりお祈りするばかりである。

合 掌